

繁華街の若者の HIV/STI 感染リスク行動に関する行動疫学研究

研究分担者：松高 由佳 (比治山大学現代文化学部)
研究協力者：草生 祐輔 (ヴァレンティノジャパン)
合田 友美 (宝塚大学看護学部)
三好 真人 (比治山大学現代文化学部)
杉本 悠貴恵 (広島大学病院)
佐藤 友哉 (比治山大学現代文化学部)
研究代表者：日高 庸晴 (宝塚大学看護学部)

研究要旨

本研究では前年度に引き続き、大阪および札幌の繁華街の若者を対象に HIV/STI に関する知識・意識・性行動・検査行動の実態に関する横断調査を実施した(研究 1)。また、同対象をターゲットとし、前年度にクラブ 1 店舗で実施・検証した HIV/STI 予防啓発プログラムを改良・拡大する形でセクシュアルヘルス向上を目的としたキャンペーンとして複数のクラブ店舗で同時多発的に介入を実施した(研究 2)。

研究 1 では、大阪市内(2 店舗)および札幌市内(1 店舗)のナイトクラブに入店した 18 歳以上の男女を対象にタブレット端末を用いたオンライン行動疫学調査を実施した(2019 年 6 月～2019 年 9 月に 6 回、21 時～深夜 1 時まで実施)。773 件の回答があり、有効回答数は 741 件であった(有効回答率 95.9%、大阪 364 件、札幌 377 件)。得られた主な知見は以下のとおりである。

- 1) 知識：「HIV 検査では膣／ペニスの診察がある」では正答率が 25%に届かず、全体の半数が「エイズにかかるとすぐに死ぬ」と誤解、76.9%が「迅速検査」の存在自体を知らず、これらの傾向は昨年度とほぼ同様であった。
- 2) 性行動：過去 6 か月間にセックス経験ありの割合は大阪、札幌とも約 7 割で、そのうち約 6 割が複数のセックスパートナーを有していた。過去 6 か月間のコンドーム使用状況(膣性交時)は、常時使用率は札幌 39.0%、(男性 44.7%、女性 22.9%)、大阪 46.2%、(男性 50.4%、女性 40.4%)であった。いずれの地方も女性の常時使用率が男性に比べ低く、これは昨年度と同様の傾向であった。
- 3) 受検行動：生涯の HIV 検査受検率は札幌 6.6% (男性 6.5%、女性 6.9%)、大阪 6.3% (男性 4.0%、女性 9.2%)であった。札幌は昨年度から約 1%低下したがほぼ同様であった。大阪は男性が約 5%も低下していた。

以上より、クラブ利用の若者の多くが HIV/STI の正しい知識を有していないことや、受検率が低いこと、HIV/STI 感染リスク行動の実態が改めて示された。

研究 2 では、大阪繁華街のクラブ 4 店舗において、HIV/STI 予防啓発介入キャンペーンを 2 日間、同時に開催した(2019 年 12 月)。コンドームに親近感を持たせるためのゲーム(2 種)や HIV/STI 予防に関する知識向上を目的としたクイズ(2 種)を実施した。昨年度の成果および、海外での HIV/STI 予防活動に携わる研究者等へのヒアリング結果を基に、新たに作成した動画をキャンペーン実施店舗のスクリーンで提示した。この動画には、HIV 検査・予防に関する知識、男性の性に関する規範意識向上のためのメッセージを盛り込んだ。のべ 527 名の参加があり、コンドームを模した輪投げゲームに参加した 103 名にゲーム後アンケートを実施したところ、86.4%が「コンドームについて、避妊だけではなく性感感染症予防という目的も意識しようと思った」、81.5%が「セックスの時にはコンドームを使おうという

気持ちが高まった」に「とてもそう思う・ややそう思う」と回答するなどの成果がみられた。性的に活発な若者をターゲットとするクラブコミュニティを巻き込んだ予防啓発介入の1つのモデルを提供したといえよう。

A. 研究目的

本分担研究では、繁華街の性的に活発な若者男女を主たる対象に、HIV/STIに関する知識・意識・性的リスク行動・検査行動の実態を明らかにする横断調査を初年次から継続して実施してきた。本研究ではこれまで明らかになった実態の継続性を検討し、若者男女へのHIV/STI予防啓発に資する基礎的データを拡充させることを目的に、昨年度と同地域（大阪と札幌）にて横断調査を実施した（研究1）。

また、昨年度実施、検証した個別型のHIV/STI予防啓発介入プログラムをさらに改良・拡大し、夜の繁華街に出入りする若者男女のための安全とセクシュアルヘルス向上を狙いとするキャンペーンとして複数のクラブ店舗で同時多発的に介入を実施し、その反応を検討した（研究2）。

B. 研究方法

【研究1】

1. 調査対象者および手続き

大阪市内（2店舗）および札幌市内（1店舗）のナイトクラブに入店した18歳以上の男女を対象に行動疫学調査を実施した。これらは全て昨年度と同店舗であった。調査時期は2019年6月～2019年9月に計6回、21時～深夜1時まで実施した。調査員がクラブの入口付近で入場客をリクルート、研究班のiPadで無記名自記式質問票サイトにアクセスし、約3分で回答する手順とした。iPad（8台）が全て使用中の場合は対象者のスマートフォンでQRコードから同サイトにアクセスし回答させた。回答終了者には謝品としてクラブのドリンクチケット（700円相当）1枚を手渡した。

外国人客および泥酔状態の客については、本調査票への回答は困難であるためリクルートの対象から除外した。

2. 質問票の構成

回答回数、属性項目（年齢、性別、恋愛対象となる性別、最終学歴、職業）、クラブ利用目的、HIV/STIや検査に関する知識、HIV検査受検経験（生涯）、過去6か月間の「セックス経験の有無、セックスした相手の性別・人数・種別・国籍、挿入行為の種類」、過去6か月間のセックス時のコンドーム使用状況等、STI既往歴（生涯）、薬物使用経験（生涯）で構成した。

3. 倫理的配慮

質問票サイトはSecure Socket Layer (SSL)によって保護され、回答者が回答データを暗号化してサーバーに送信することで情報漏洩を防止した。対象者リクルートの際にはポスター、口頭での説明に加え、質問票サイト上の説明にて研究目的や質問項目、データの取り扱い、プライバシー保護等について十分に説明し、同意を得た場合にのみ回答画面に進む手続きとした。回答途中でも回答を取りやめることができる旨を表示し、調査終了画面には苦情・問い合わせ先を明示した。本研究の実施にあたり、比治山大学研究倫理審査委員会の承認を得た。

【研究2】

1. 介入対象者および手続き

2019年12月、世界エイズデーに合わせ大阪市内の同地区に所在する繁華街のクラブ4店舗において、HIV/STI予防啓発介入キャンペーンを同時に開催した（22時～26時、2日間）。対象者はクラブに入店した18歳以上の男女であった。コンドームに親近感を持たせるためのゲーム（2種）やHIV/STI予防に関する知識向上を目的としたクイズ（2種）を実施し、最後まで参加した者には謝品としてクラブのドリンクチケット（700円相当）またはグッズ（有名メーカーの雑貨やコンドーム等）を提供した。謝品の種類は、はずれ無し

のクジによって選定した。いずれの店舗でも、クラブ内にキャンペーンブースを設置し、調査員 2 名が待機し、入店した客にポスターおよびタブレット端末を見せながらキャンペーンについて説明しリクルートを行った。同意が得られた客には、クイズ、またはゲームを進めた。クイズへの回答およびゲーム実施後の反応評定では全てオンラインのクイズフォームを使用し、回答には研究班のタブレット端末を用いた。タブレット端末が全て使用中の場合は対象者のスマートフォンで QR コードから同サイトにアクセスし回答させた。

キャンペーンブースは注目を引くようターポリンを配置し、楽しい雰囲気に見えるよう設営した。謝品としてのグッズは若者に人気のメーカーから協賛を受け提供した。さらに、昨年度の成果および、海外での HIV/STI 予防啓発活動に携わる研究者等へのヒアリング結果を基に、新たに作成した動画をキャンペーン実施店舗内の複数のスクリーンで提示した。この動画には、HIV 検査・予防に関する知識、男性の性に関する規範意識向上のためのメッセージを盛り込んだ。ゲームについても、海外での HIV/STI 予防啓発の研究者等へのヒアリング結果を参考に考案した。

2. 介入のためのクイズ、ゲームの構成

クイズ：昨年度クラブにて HIV/STI 予防啓発のために実施したクイズ（1 種）を基にいくつか項目を追加し、2 種（A、B 各 5 項目）を作成し、店舗によって実施クイズを変えた。フェイス項目（年齢、性別等）に続いて HIV/STI に関する基礎知識、予防、検査に関する項目で構成し、「○（そう思う）」「×（そう思わない）」「？（わからない）」の 3 件法で回答を求めた。クイズ A では一部男性用項目と女性用項目があり、フェイス項目で回答した性別に応じて分岐させた。回答終了後は、クイズの正答と短い解説のページ（解説画面）に進むように設定した。解説画面の閲覧中は対象者が飛ばさず読んでいるかどうか調査員が様子を確認しながら進めた。解説画面を最後まで確認すると謝辞画面が提示され、それを調査員に見せた回答者には、謝品を提供し終了とした。

ゲーム：「バナナゲーム」と「 Condom 風船

55 ゲーム」の 2 種を用意し、店舗によって実施ゲームを変えた。説明と同意→ゲーム実施→ゲーム後の反応評定（5 項目）→終了後に謝品提供、という手順で進めた。ゲームはいずれも、 Condom への親近感や使用意識を高める目的で実施していること、ゲーム終了後に反応評定があることを対象者に説明した。

「バナナゲーム」は、台に立てた 3 本のバナナ（フィギュア）に向けてカラフルな Condom 様のフィギュア 5 個を輪投げの要領で投げ、より多くを被せることを目指すものであった。「 Condom 風船ゲーム」は調査員が Condom の実物にポンプで空気を入れていく様を対象者に見せ、対象者には 55cm の長さまで膨らんだと思った時点でストップをかけてもらい、より 55cm に近づけることを目指すものであった。いずれも、個人でも友人同士で競う形でも実施可能とした。

ゲーム後の反応評定ではフェイス項目（年齢、性別）に続いて、ゲームを通じて Condom への親近感や使用意図等が高まったかどうかを 4 項目 5 件法で尋ね、最後にゲームの感想を選択させる 1 項目（複数回答可）で終了とした。

3. 倫理的配慮

サイトおよびゲーム後の反応評定サイトは Secure Socket Layer (SSL) によって保護されており、回答データの送信の際は内容を暗号化し、情報漏洩を防止した。参加者リクルートの際にはポスター、口頭での説明に加え、サイト上の説明にて研究目的や質問項目、データの取り扱い、プライバシー保護、苦情・問い合わせ先等について十分に説明し、同意を得た場合にのみその後の手順に進む手続きとした。また、回答途中でも回答を取りやめることができる旨を表示した。本研究の実施にあたり、比治山大学研究倫理審査委員会の承認を得た。

C. 研究結果

【研究 1】

1. 回答者

773 件の回答があり、2 回目以上の回答、回答傾向から不正回答が予見されるケース、性別で

「その他」を選択したケースを分析から除外した。その結果、有効回答数 741 件であった（有効回答率 95.9%、大阪 364 件、札幌 377 件）。男性 418 名（56.4%）、女性 323 名（43.6%）、年齢は平均 22.3 歳（SD=4.3）で 10 代が 15.1%、20 代が 80.6%を占めた（range 18~55）（表 1）。

男性の 94.3%、女性の 86.7%が恋愛対象として異性のみを選択した（表 2）。その他、クラブ利用目的、職業、最終学歴については表 2 に示した。なお、以下クロス集計の有意水準は 5%以下とした。

2. HIV/STI に関する知識、検査の知識

正答割合が最も低かったのは「HIV（エイズ）の検査には、内診（婦人科や産婦人科での膣の診察）がある／ペニスの診察がある」で正答率女性 13.6%、男性 22.0%であった（男女別項目）。つまり HIV 検査に性器の診察があるかどうかについて約 8 割前後の男女が誤解していた。ついで正答率が低かったのは、「その日のうちに結果がわかる HIV（エイズ）検査がある」で、正答率 23.1%（男性 26.1%、女性 19.2%）であった。そのほかにも「HIV（エイズ）にかかると、すぐ死ぬと思う」は正答率 5 割前後であるなど、HIV/STI に関する知識、検査の知識は昨年度同様、全体的に低いことが明らかになった。男性は全ての項目、女性は 5 項目中 4 項目で札幌より大阪における正答率が低い傾向にあった（表 3）。

年齢層別にみると、「STI 罹患で HIV に感染しやすくなる」「その日のうちに結果がわかる HIV 検査がある」以外の項目で、年齢層による正答率の割合に有意差がみられ、若年層ほど正答率が低い傾向がみられた。特に、HIV 検査で性器の診察がないことを理解している割合は 10 代で 10%に満たず非常に低かった（表 8）。

3. HIV 検査受検行動

生涯の HIV 検査受検率は札幌 6.6%、大阪 6.3%であった。札幌では男女でほとんど差がない（男性 6.5%、女性 6.9%）のに対し、大阪では男性が女性の半分以下にとどまった（男性 4.0%、女性 9.2%）。

受検経験ありの回答者に受検場所を尋ねたと

ころ、全体で最も割合が高かったのは病院・診療所等で 47.9%、次いで保健所等の 43.8%であった。地方別にみると保健所等は札幌 56.0%、（男性 57.1%、女性 54.5%）、大阪 30.4%（男性 37.5%、女性 26.7%）、病院・診療所等は札幌 40.0%、（男性 35.7%、女性 45.5%）、大阪 56.5%（男性 12.5%、女性 80.0%）、郵送検査は札幌 8.0%（男性 14.3%、女性 0%）、大阪 0%であった。大阪では病院・診療所等での受検割合について男女間に有意差がみられた（表 4）。

年齢層別にみると受検経験割合は年齢層による有意差がみられ、20 代以下において割合が一桁と特に低い値であった（10 代 4.5%、20 代 6.0%）。（表 9）。

4. 性行動

過去 6 か月間にセックス（膣性交、アナルセックス、オーラルセックス、相互マスターベーション）経験ありの割合は札幌 72.1%（男性 74.2%、女性 69.4%）、大阪 71.2%（男性 73.1%、女性 68.7%）で、そのうち約 6 割が複数のセックスパートナーありと回答した（表 5-1、5-2）。

過去 6 か月間の相手種別等の詳細は表 5-2 に示した。外国籍の相手とのセックス経験ありは札幌で 5.5%（男性 5.0%、女性 6.3%）、大阪で 3.5%（男性 3.4%、女性 3.6%）であった。過去 6 か月間のセックスの相手種別（複数回答）では、「恋人など特定の相手」が札幌 57.0%、（男性 56.5%、女性 57.7%）、大阪 57.9%（男性 53.7%、女性 63.4%）と、いずれの地方においても最も割合が高く、次いで「友達・セフレと」が札幌 46.0%、（男性 47.8%、女性 43.2%）、大阪 45.9%（男性 46.3%、女性 45.5%）、「街やクラブでナンパされた相手と」札幌 12.1%（男性 11.8%、女性 12.6%）、大阪 7.7%（男性 7.5%、女性 8.0%）の順に割合が高かった。金銭授受を介したセックスについては「お金を払った相手と」では女性は 0%で、男性のみ札幌 5.0%、大阪 6.8%となった。「お金をくれた相手と」と回答したのは札幌 0.7%（男性 1.2%、女性 0%）、大阪 0.8%（男性 0%、女性 1.8%）であった。

年齢層別にみると、30 代が最も過去 6 か月間のセックス経験率が高く 80.0%、次いで 40 代以上が

75.0%、20代73.7%、最も低かったのは10代58.9%であり、年齢層で有意差がみられた(表10)。

過去6か月間にセックスありと回答した人に、経験した性交の種類(複数回答)を尋ねたところ、膣性交が札幌91.5%、(男性94.4%、女性87.4%)、大阪85.3% (男性86.4%、女性83.9%)で、札幌のみ男性が女性より経験割合が有意に高かった。アナルセックス(挿入側)は札幌男性5.0%、大阪男性6.8%、アナルセックス(被挿入側)は、札幌4.8%、(男性1.9%、女性9.0%)、大阪5.8%、(男性1.4%、女性11.6%)であった。過去6か月間に膣性交があったと回答した人にコンドーム使用状況(膣性交時)を尋ねたところ、常時使用率は札幌39.0%、(男性44.7%、女性29.9%)、大阪46.2%、(男性50.4%、女性40.4%)であり、いずれの地域も女性の常時使用率が男性に比べ低かった(表5-3)。

年齢層別にみたコンドーム使用状況(膣性交)では40代が常用率62.5%で最も高く、次いで10代57.6%、20代40.5%、最も低かったのが30代で15.4%であった(表10-2)。

5. 既往歴(生涯・複数回答)

既往なしの割合は、札幌で85.1%(男性84.3%、女性86.3%)、大阪で85.7%(男性88.1%、女性82.8%)であった。既往歴ありについては、最も割合が高かったのはクラミジアで、札幌8.2%(男性8.8%、女性7.5%)、大阪7.7%(男性4.5%、女性11.7%)であり、大阪では女性が有意に高い割合となった。梅毒は札幌1.9%(男性1.8%、女性1.9%)、大阪5.8%(男性5.5%、女性6.1%)と札幌より大阪で高い傾向にあった。淋菌感染症は札幌2.9%(男性4.1%、女性1.3%)、大阪3.3%(男性3.0%、女性3.7%)であった。B型肝炎は札幌男性が2.8%に対し女性は0%、大阪では男性が0%に対し女性が4.3%と地方により逆の傾向がみられた(表6)。これらの結果を概観すると、札幌では若干既往ありの割合が昨年に比して減少しているが、大阪では増加していた。

年齢層別にみると(表11)、高い年齢層ほど既往なしの割合が低くなる傾向がみられたが、生涯既往を聞いていることも要因であろう。

6. アルコール関連・薬物使用経験(生涯・複数回答)

最も経験率の高かったアルコールでの「酔いつぶれ(お酒で記憶をなくした)」は、札幌26.0%(男性27.2%、女性24.4%)、大阪20.3%(男性17.9%、女性23.3%)であった。次に経験率が高かったのは札幌では大麻で3.7%(男性5.5%、女性1.3%)、大阪では睡眠薬・睡眠導入剤で3.0%(男性3.0%、女性3.1%)と続いた(表7)。違法、脱法ドラッグのいずれかを生涯に経験した割合は札幌5.6%(男性8.3%、女性1.9%)、大阪3.3%(男性5.0%、女性1.2%)で、女性より男性が高く、特に札幌の男性が最も高い割合を示した。

年齢層別にみると、MDMA・コカイン・危険ドラッグの使用経験者が20代にのみ認められた。大麻使用経験者はどの年齢層でも認められた(10代2.7%、20代2.8%、30代5.0%、40代以上8.3%)。10代(未成年)にも関わらず「酔いつぶれ(お酒で記憶をなくした)」と回答した者が17.0%という問題が明らかとなった(表12)。

【研究2】

1. 参加者

のべ527名(男性333名、女性194名)の参加が得られた。平均年齢は23.7歳(SD=4.6)で10代が8.2%、20代が80.1%、30代が10.6%、40代が1.1%であった。

2. ゲーム参加による反応

バナナゲーム 103名(男性64名、女性39名)の参加者を対象に、以下の項目について5件法でゲーム後の反応評定を行った。得点が高いほど項目で示した反応が強いことを意味する。「今までよりコンドームが身近なものに感じられた」では平均得点4.2(SD=1.0)、男性平均4.3(SD=.95)、女性平均4.0(SD=1.2)であった。「セックスの時にはコンドームを使おうという気持ちが高まった」では平均得点4.3(SD=1.1)、男性平均4.3(SD=1.1)、女性平均4.3(SD=1.2)であった。「今までよりコンドームに対する羞恥心(恥ずかしさ)が減った」では平均得点4.3(SD=1.0)、男性

平均 4.3 (SD=1.0)、女性平均 4.3 (SD=1.1) であった。「コンドームについて、避妊だけではなく性感染症予防という目的も意識しようと思った」では平均得点 4.5 (SD=0.8)、男性平均 4.6 (SD=0.9)、女性平均 4.5 (SD=0.8) であった。性別による得点の有意差はみられなかった。

ゲームの感想を複数回答で尋ねたところ、「楽しかった」が 72.8% (男性 71.9%、女性 74.4%)、「おもしろかった」が 14.6% (男性 10.9%、女性 20.5%)、「難しかった」が 9.7% (男性 12.5%、女性 5.1%)、「新鮮だった」が 23.3% (男性 23.4%、女性 23.1%)、「友達にも勧めたい」が 2.9% (男性 4.7%、女性 0%)、「恥ずかしかった」が 1.9% (男性 3.1%、女性 0%) であった。

コンドーム風船ゲーム 53 名 (男性 39 名、女性 14 名) の参加者を対象に、以下の項目について 5 件法でゲーム後の反応評定を行った。得点が高いほど項目で示した反応が強いことを意味する。「今までよりコンドームが身近なものに感じられた」では 3.7 (SD=1.2)、男性平均 3.8 (SD=1.2)、女性平均 3.6 (SD=1.3) であった。「セックスの時にはコンドームを使おうという気持ちが高まった」では平均得点 3.8 (SD=1.2)、男性平均 3.8 (SD=1.2)、女性平均 3.9 (SD=1.0) であった。「今までよりコンドームに対する羞恥心 (恥ずかしさ) が減った」では平均得点 3.7 (SD=1.3)、男性平均 3.7 (SD=1.3)、女性平均 3.6 (SD=1.2) であった。「コンドームについて、避妊だけではなく性感染症予防という目的も意識しようと思った」では平均得点 4.2 (SD=1.0)、男性平均 4.1 (SD=1.1)、女性平均 4.3 (SD=0.6) であった。性別による得点の有意差はみられなかった。

ゲームの感想を複数回答で尋ねたところ、「楽しかった」が 52.8% (男性 51.3%、女性 57.1%)、「おもしろかった」が 17.0% (男性 20.5%、女性 7.1%)、「難しかった」が 17.0% (男性 15.4%、女性 21.4%)、「新鮮だった」が 24.5% (男性 23.1%、女性 28.6%)、「友達にも勧めたい」が 1.9% (男性 0%、女性 7.1%)、「恥ずかしかった」が 1.9% (男性 0%、女性 7.1%) であった。「コンドームの強度がわかった」が 1.9% (男性 2.6%、女性 0%) であった。「コンドームの伸びの良さがわかった」が

7.5% (男性 7.7%、女性 7.1%) であった。

3. クイズ結果 (表 13)

クイズ A 参加者は 168 名であった (男性 94 名、女性 74 名)。女性梅毒流行に関する項目 (「2018 年は、戦後初めて梅毒の年間患者数が 6000 人を突破した (男性用項目)」「この 5 年間で、20 代女性の梅毒感染者数が急増した (女性用項目)」)、では男性の正答率が 56.4%、女性の正答率が 41.9% であった。「エイズにかかるとすぐに死ぬと思う」では、正答率 57.7% (男性 61.7%、女性 52.7%) であった。「HIV/エイズの検査では内診/ペニスの診察がある (前者が女性用項目、後者が男性用項目)」では男性の正答率 35.1%、女性の正答率が 18.9% であった。「コンドームを忘れずに持ち歩くには、財布に入れておくのが最も良い」では正答率 36.9% (男性 43.6%、女性 28.4%) であった。「HIV (エイズ) に感染しても、服薬治療を受けることで安全に妊娠、出産ができる」では正答率 33.9% (男性 39.4%、女性 27.0%) であった。男性より女性の正答率がいずれも低い傾向にあったが、男性においても正答率が 6 割を超える項目はなく、低い水準であった。

クイズ B 参加者は 203 名 (男性 136 名、女性 67 名) であった。「タダ (無料) で HIV 検査を受けられる場所がある」では正答率 58.1% (男性 61.8%、女性 50.7%) であった。「タダ (無料) で梅毒検査を受けられる場所がある」では正答率 50.2% (男性 57.4%、女性 35.8%) であった。「性感染症 (性病) にかかっても症状が出ないことがある」では正答率 54.2% (男性 55.9%、女性 50.7%) であった。「性感染症 (性病) にかかっていると HIV に感染しやすくなる」では正答率 50.7% (男性 56.6%、女性 38.8%) であった。「その日のうちに結果がわかる HIV 検査がある」では正答率 38.9% (男性 44.9%、女性 26.9%) であった。クイズ B でも全ての項目で女性が男性より正答率が低い傾向にあり、特に梅毒検査や HIV の迅速検査に関する正答率が低かった。

D. 考察

研究 1 では、昨年度と同様に大阪、札幌の 2 地

点、同店舗にて横断調査を行った。知識の結果から、クラブの若者に HIV/STI の基本的知識が浸透していないこと、特に女性や年代が若いほど知識が低いことが昨年度同様に示された。特に、10代では HIV 検査に性器の診察があるかどうかについて低い水準だった昨年度からさらに正答率が低下するなど（10代女性正答率が昨年度 10.9%→今年度 6.0%、10代男性正答率が同じく 18.8%→9.7%）、深刻な状況が加速していると考えられた。受検率については特に大阪の男性で低下がみとめられた。また、年齢層の特徴では 10代、20代の若い年代で受検率が低かった。受検推奨のための介入は引き続き重要な課題であることが改めて示された。今年度の特徴として、大阪の女性受検者では保健所等より病院・診療所等での受検割合が非常に高かった。この背景については本研究のデータからは不明だが、今後も注視していく必要がある。

性行動については、過去6か月間のセックス経験率は昨年度より若干割合が低下したが、回答者の多くが過去6か月間に複数のセックスパートナーを有し、コンドーム常用率が男性より女性において低いという傾向は昨年度と同様であった。女性への啓発とともに、男性も含めた性規範改善への働きかけが今後も必要である。年齢層別にみると10代、20代より30代でコンドーム常用率が低いことが示された。30代は知識としては若年層より高い傾向にあるものの、年齢を重ねていく中で予防意識が低下することが考えられ、注意が必要である。

アルコール・薬物使用経験については10代（未成年）にも関わらず「酔いつぶれ（お酒で記憶をなくした）」経験をもつ割合が17%と、昨年度とほぼ同様の結果が明らかとなった。このような実態は性的リスクとも関連するため、夜の街に出る若者へのアルコール問題への介入はセクシュアルヘルスの視点からも重要であると捉える必要がある。違法・脱法薬物に関しては大阪より札幌の経験割合が高く、これも昨年度から継続して認められた傾向である。背景についての解明、介入が急務である。

研究2では、わが国における初の試みとしてク

ラブコミュニティを巻き込んだ同時多発的 HIV/STI 予防啓発キャンペーンを実施した。昨年度実施したクラブでの動画による個別的介入では前後比較試験により効果は確認できたものの、介入数を伸ばすことに時間がかかり、ヘッドホンを使用しても音声聞き取れないなどの方法的限界があった。そこで、より広範囲に介入でき、クラブなど若者の娯楽空間にもなじみ、楽しく印象に残る形で HIV/STI 予防意識やコンドームへの親近感を向上させるという狙いを基に本年度のキャンペーンを実施した。全体の参加者数や反応評定から、これらの狙いは概ね達成できたと考えられた。調査員に話しかけてくる対象者も一定数みられ、参加者からは、「HIV のことに興味を持った」「若者への啓発はすごく大切だと思う」といった声も寄せられた。コンドーム風船ゲームよりバナナゲームのほう反応評定値が肯定的であったことから、バナナゲームの方がより有効と考えられた。

キャンペーン中に店舗内で繰り返し提示した動画（HIV/STI の知識や性規範意識を向上させるメッセージで構成）については、今回具体的な効果評価を行うことはできなかったが、横断調査（研究1）と同じクイズ項目で比較すると、クイズ参加者の正答率が横断調査の正答率よりも高かったことから、動画を目にしたことで知識が高まった可能性が考えられる。

E. 結論

本研究では、性的に活発な若者の性行動の実態、HIV/STI や検査に関する知識の実態等について、基礎的データを得ることができた。大阪、札幌の同じ店舗において、2年連続で横断調査を実施し、データをより確かなものにするのができたと考えられる。その結果、特に女性や若者に対する知識の普及や性的健康への意識を高めていく必要性が確認された。

また、昨年度実施した繁華街の若者を対象とした HIV/STI 予防啓発介入を改良し、ラブコミュニティを巻き込んだ新たな予防啓発介入（キャンペーン）を開発、実施した。これにより、個人レベルを超え集団レベルでセーフセックスへ

の意識や行動を促進することができた。しかし、今回は2回の介入のみであったことから、介入が届いていない層も多くいること、時間の経過に伴って予防意識が薄れることが考えられ、今後も繰り返し同様のキャンペーンを実施し、啓発メッセージを送り続けることで、若者のHIV/STI予防への意識、性の安全への意識を定着させていくことが必要である。

F. 研究発表

(和文)

1. 松高由佳・大塚泰正・飯田順子・藤 桂・津野香奈美 他：性的マイノリティへの適切な対応を促進する研修プログラムの留意点－産業保健スタッフ対象の研修に関する検討－ 総合保健科学, 36, 2020, 印刷中.

(口頭発表)

1. Tomomi Goda、 Yuka Matsutaka、 Yasuharu Hikada : Reasons for condom use or nonuse among individuals undergoing sexually transmitted infection examination in Japan. The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science. 2020、Osaka、 Japan
2. 大塚泰正・松高由佳・津野香奈美・藤 桂・堀口康太他： セクシュアル・マイノリティへの理解と支援を促進させるための研修プログラムのパイロットスタディ, 第26回日本産業精神保健学会, 2019年, 東京.
3. 津野香奈美・大塚泰正・藤 桂・松高由佳・飯田順子他：LGBT等の性的マイノリティ労働者における暴力の経験と精神的健康状態, 第26回日本行動医学会学術総会, 2019年, 東京

G. 引用

なし